

第11章 動 物

11-1	工事中		325
11-2	供用時		350

第 11 章 動 物

11-1 工事中

11-1-1 概 要

建設機械の稼働（大気質、騒音及び振動）による鳥類への影響について検討を行った。

11-1-2 調 査

既存資料調査及び現地調査により、現況の把握を行った。

(1) 既存資料調査

ア 調査事項

重要な種及び注目すべき生息地の分布の状況（鳥類）

イ 調査方法

「名古屋市野鳥生息状況調査報告 名古屋の野鳥 2014」（名古屋市ウェブサイト）を収集・整理した。

ウ 調査結果

第 1 部第 4 章 4-1 (4) ア「動物」（p. 70 参照）に示したとおりである。

(2) 現地調査

ア 調査事項

重要な種及び注目すべき生息地の分布の状況（鳥類）

イ 調査方法

「自然環境アセスメント技術マニュアル」（（財）自然環境研究センター，平成 7 年）に準拠し、以下に示すとおり行った。

(ア) ポイントセンサス調査

満潮時及び干潮時に各 1 回、双眼鏡及び望遠鏡を用いて、調査地点から概ね 300m 以内の鳥類の種名、個体数、場所及び行動等を確認し、記録した。ただし、300m 以遠であっても重要な種を識別することができた場合には、同様に記録した。

(イ) 任意観察調査

事業予定地内を任意に踏査し、鳥類の種名、個体数、場所及び行動等を確認し、記録した。

ウ 調査場所

調査場所を図 2-11-1 (1), (2) に示す。

事業予定地に隣接する水域を見渡することができる 2 地点において、ポイントセンサス調査を行った。また、事業予定地内において、任意観察調査を行った。

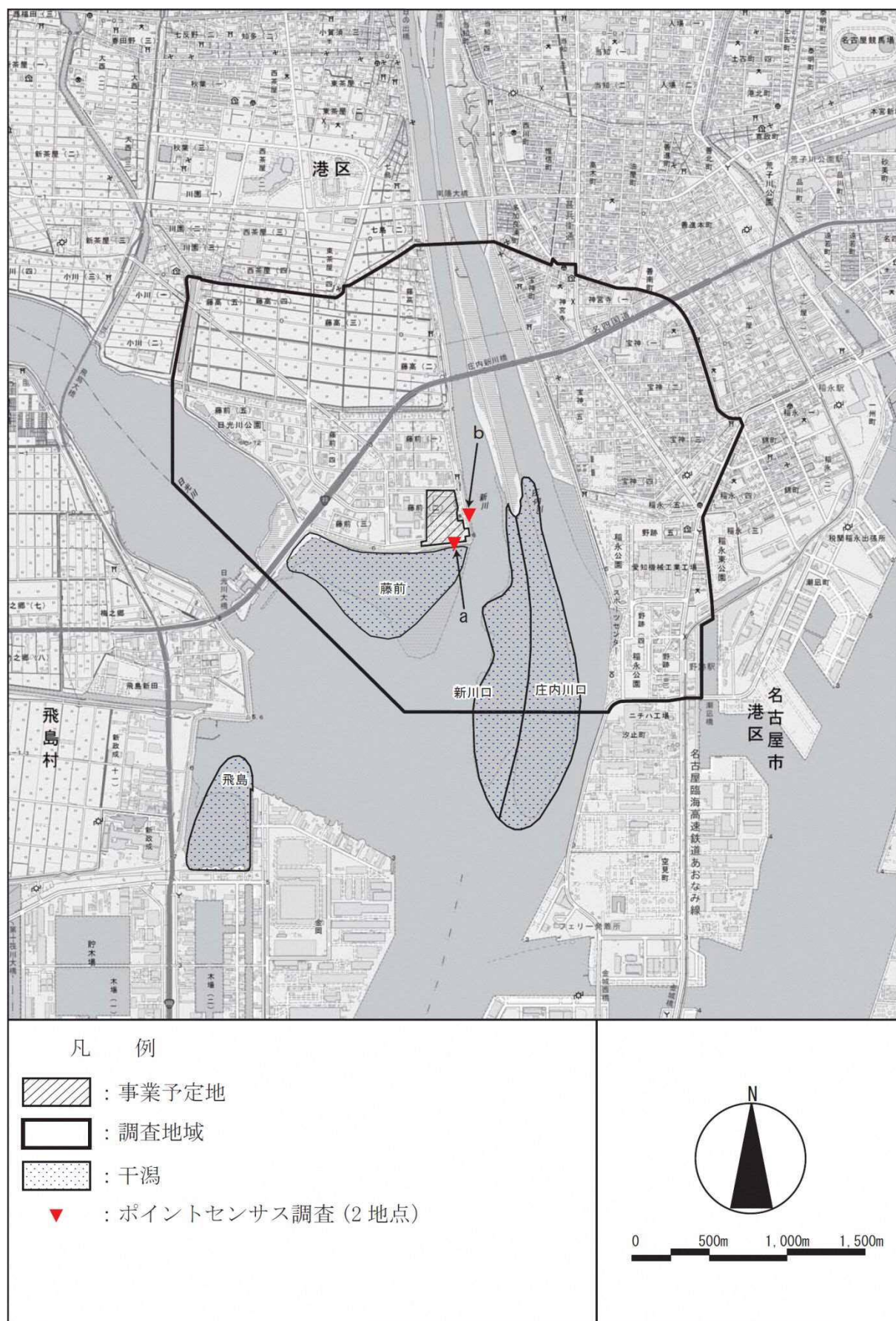
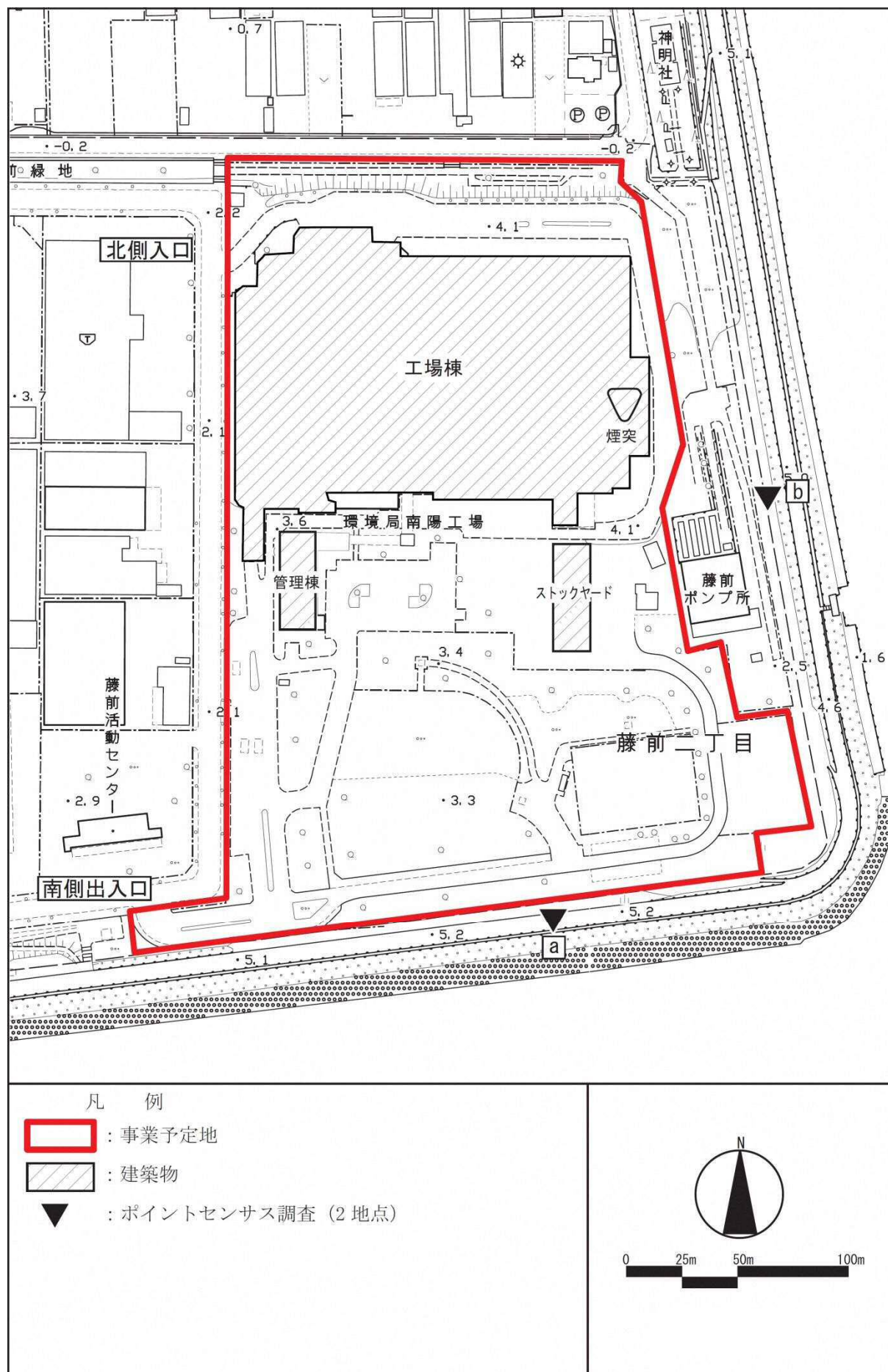


図 2-11-1(1) 鳥類調査地点



エ 調査時期

調査時期を表 2-11-1 に示す。

春季、繁殖期（春～初夏）、夏季、秋季及び冬季に各 1 回調査を実施した。調査の対象とした鳥類は、干潟を採餌・休息場所として利用する種であり、干潮時と満潮時で行動内容が異なることが考えられるため、可能な範囲で潮汐との関係を把握できるよう調査時間帯を設定した。

表 2-11-1 調査時期

区 分	調 査 日	調 査 時 刻		
春 季	平成30年 5月15日（火）	ポイント	地点 a	10:20 ～ 11:50（干潮時）、4:25 ～ 5:25（満潮時）
		センサス調査	地点 b	12:00 ～ 13:30（干潮時）、5:35 ～ 6:35（満潮時）
		任意観察調査		7:00 ～ 10:00
繁殖期	平成30年 6月29日（金）	ポイント	地点 a	10:50 ～ 12:20（干潮時）、4:50 ～ 5:50（満潮時）
		センサス調査	地点 b	12:30 ～ 14:00（干潮時）、6:25 ～ 7:25（満潮時）
		任意観察調査		7:40 ～ 10:40
夏 季	平成30年 8月28日（火）	ポイント	地点 a	11:30 ～ 13:00（干潮時）、5:30 ～ 6:30（満潮時）
		センサス調査	地点 b	13:30 ～ 15:00（干潮時）、6:40 ～ 7:40（満潮時）
		任意観察調査		8:00 ～ 11:00
秋 季	平成30年 10月7日（日）	ポイント	地点 a	9:00 ～ 10:30（干潮時）、15:35 ～ 16:35（満潮時）
		センサス調査	地点 b	10:40 ～ 12:10（干潮時）、16:40 ～ 17:40（満潮時）
		任意観察調査		7:00 ～ 8:30、13:50 ～ 15:20
冬 季	平成31年 1月19日（土）	ポイント	地点 a	9:00 ～ 10:30（干潮時）、15:00 ～ 16:00（満潮時）
		センサス調査	地点 b	10:40 ～ 12:10（干潮時）、16:10 ～ 17:10（満潮時）
		任意観察調査		7:20 ～ 8:40、13:20 ～ 14:40

オ 調査結果

(7) 概 要

鳥類確認種総括表を表 2-11-2 に示す。(詳細は資料 13-1 (資料編 p. 403) 参照)

9 目 26 科 63 種の鳥類が確認され、重要な種は、シロチドリ、コアジサシ、ハヤブサなど 12 種が確認された。種別の観察例数は、カワウが突出して多く、次いで、カワラバト、ムクドリ、カルガモの順であった。

干潮、満潮別にみた鳥類相は、潮位の違いによる大きな変化は認められなかったが、確認個体数は干潮時に多くなる傾向であった。

繁殖に係る行動は、ムクドリ、スズメなど 5 種について巣材の運搬等が確認された。

表 2-11-2 鳥類確認種総括表

No.	目 名	科 名	種 名	確認時期					確認場所		重要な種
				春 季	繁殖期	夏 季	秋 季	冬 季	事業予定地内	事業予定地外	
1	カモ	カモ	オカヨシガモ	1				14		15	
2			ヒドリガモ					18		18	
3			マガモ	2	4	5	4	27		42	
4			カルガモ	14	27	192	153	110	2	494	
5			オナガガモ				68	1		69	
6			コガモ				55	45		100	
7			キンクロハジロ	3			41	6		50	
8			スズガモ	20		4	15	125		164	
9	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ					33		33	
10			ハジロカイツブリ					2		2	
11	ハト	ハト	キジバト	12	6	12	9	5	40	4	
12	カツオドリ	ウ	カワウ	137	241	30	16	1,007	15	1,416	
13	ペリカン	サギ	ササゴイ	1						1	
14			アマサギ	2	13					15	
15			アオサギ	8	8	12	9	11		48	
16			ダイサギ	15	11	83	29	8	1	145	
17			コサギ	1	1	25	6	1		34	
18	チドリ	チドリ	ダイゼン	24		49				73	
19			シロチドリ	2						2	●
20		シギ	オグロシギ	1						1	●
21			オオソリハシシギ	26		2				28	●
22			チュウシャクシギ	87						87	
23			ホウロクシギ	1						1	●
24			アオアシシギ	9		5	2			16	
25			キアシシギ	18		6				24	
26			ソリハシシギ	13		2				15	
27			イソシギ	7		8	8	5		28	
28			オバシギ			12				12	●
29			トウネン	12						12	
30			ハマシギ	281						281	●
31		カモメ	ユリカモメ	2				3		5	
32			ズグロカモメ	1						1	●
33			ウミネコ		4	84	54			142	
34			カモメ					5		5	
35			セグロカモメ			10	1	8	1	18	
36			オオセグロカモメ					1		1	
37			コアジサシ	12						12	●
38	タカ	ミサゴ	ミサゴ	1	1	14	11	8	2	33	●
39		タカ	トビ	2	1	1	3		3	4	
40			チュウヒ				1	3		4	●
41			オオタカ				1			1	●
42	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	2	4	1	2		8	1	
43			ハヤブサ			1	3	4	6	2	●
44	スズメ	モズ	モズ			1	6	2	9		
45		カラス	ハシボソガラス	23	17	18	15	29	43	59	
46			ハシブトガラス	8	8	8	6	4	20	14	
47		シジュウカラ	シジュウカラ	2					2		
48		ツバメ	ツバメ	34	19	3			31	25	
49		ヒヨドリ	ヒヨドリ	1	1	2	234	34	190	82	
50		ウグイス	ウグイス					2	1	1	
51		エナガ	エナガ				8			8	
52		メジロ	メジロ	1	1		3	16	21		
53		ヨシキリ	オオヨシキリ	4	1					5	
54		ムクドリ	ムクドリ	124	62	29	219	97	473	58	
55		ヒタキ	ツグミ					3	3		
56			ジョウビタキ					1		1	
57			イソヒヨドリ			1				1	
58		スズメ	スズメ	46	21	14	20	16	96	21	
59		セキレイ	ハクセキレイ	9	5	8	7	8	25	12	
60			セグロセキレイ				2			2	
61		アトリ	カワラヒワ	21	10	1	5	5	33	9	
62		ホオジロ	アオジロ					1		1	
63	(ハト)	(ハト)	カワラバト (外来種)	96	106	184	175	112	624	49	
9 目 26 科 63 種			種類数合計	42	23	32	33	37	23	59	12
			個体数合計	1,086	572	827	1,191	1,780	1,649	3,807	-

注) 1: 重要な種の選定基準は、後述する(㊦) a 「重要な種の選定基準」(p. 334 参照) に示す。

2: 「●」は、重要な種であることを示す。

(イ) 行動内容

調査地点別の行動内容の内訳を図 2-11-2(1)～(3)に示す。

行動内容は、事業予定地内（任意観察調査）では飛翔及び休息が多く、両者で全体の 70%以上を占めた。地点 a（ポイントセンサス調査）では休息、採餌・採餌及び飛翔・遊泳が同程度であり、全体の 90%以上を占めた。地点 b（ポイントセンサス調査）では採餌・採餌が全体の約 50%を占め、残りは飛翔・遊泳及び休息が大半を占めた。事業予定地内の確認個体は、飛翔するカワラバト、ムクドリ及びヒヨドリ、休息するムクドリが多かった。

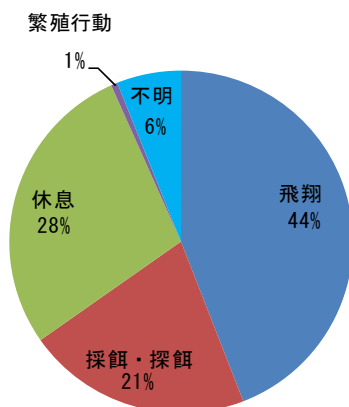


図 2-11-2(1) 事業予定地内（任意観察調査）における行動内容内訳

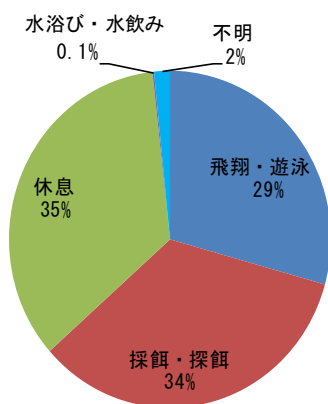


図 2-11-2(2) 地点 a（ポイントセンサス調査）における行動内容内訳

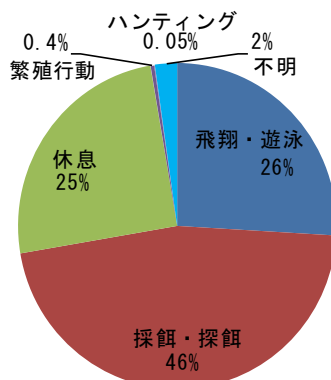


図 2-11-2(3) 地点 b（ポイントセンサス調査）における行動内容内訳

(ウ) 利用環境

調査地点別の利用環境の内訳を図 2-11-3(1)～(3)に示す。

利用環境は、事業予定地内（任意観察調査）では人工造成物（舗装道路、建物）及び並木が多く、地点 a（ポイントセンサス調査）及び地点 b（ポイントセンサス調査）では、いずれも水域が全体の約半分を占めた。事業予定地内の確認個体は、人工造成物のカラバト及びムクドリ、並木のヒヨドリが多かった。

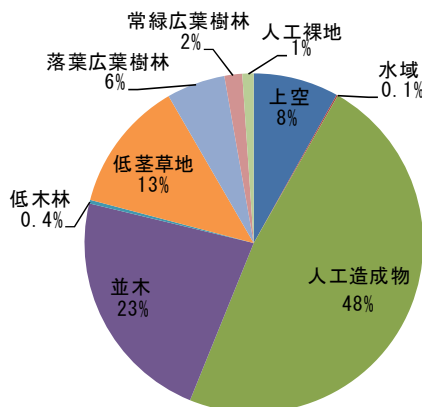


図 2-11-3(1) 事業予定地内（任意観察調査）における利用環境内訳

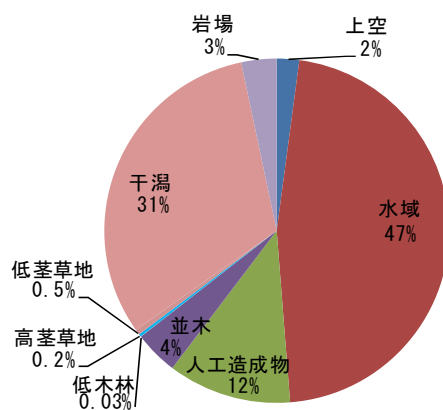


図 2-11-3(2) 地点 a（ポイントセンサス調査）における利用環境内訳

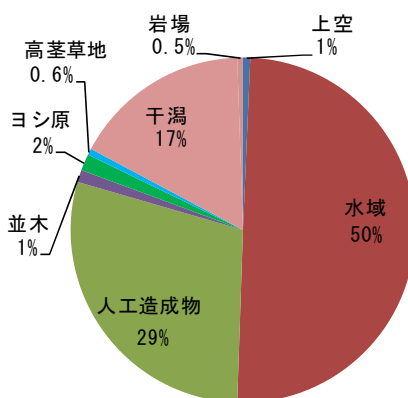


図 2-11-3(3) 地点 b（ポイントセンサス調査）における利用環境内訳

(I) 繁殖状況

表 2-11-3(1)に示すとおり、事業予定地内外で 5 種の繁殖兆候が確認されたが、重要な種（重要な種の選定基準は、後述する(オ) a 「重要な種の選定基準」(p. 334 参照))の繁殖兆候は見られなかった。

表 2-11-3(1) 繁殖兆候が確認された種

No.	目 名	科 名	種 名	ランク	内 容	確認時期					確認場所	
						春 季	繁殖期	夏 季	秋 季	冬 季	事業予定地内	事業予定地外
1	ハト	ハト	キジバト	B	巣材の運搬			○			○	
2	スズメ	ツバメ	ツバメ	B	巣への移動	○					○	
3		ヨシキリ	オオヨシキリ	B	さえずりの確認	○	○					○
4		ムクドリ	ムクドリ	B	巣材の運搬	○					○	
					餌の運搬		○				○	
5		スズメ	スズメ	B	巣材の運搬	○					○	
2 目 5 科 5 種			種類数合計			4 種	2 種	1 種	0 種	0 種	3 種	3 種

注) ランク区分は、表 2-11-3(2)に示すとおりとした。

表 2-11-3(2) 繁殖状況のランク区分

繁殖の可能性がある (ランク B)	
成 鳥	その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツツキ類のドラミングを含める）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。
	求愛行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。
	交尾行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。
	威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナの存在が考えられる。
	巣があると思われる所に成鳥が訪れた。ただし、そこが埒（ねぐら）である場合は除く。
	造巣行動（巣穴掘りを含む）を見た。
	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに周囲に巣を構えていると思われる場合に限る。
	成鳥がヒナへの餌を運搬しているが、巣が周囲にあるかどうか分からない。

注) 区分基準は、「全国鳥類繁殖分布調査」(環境省ウェブサイト)における繁殖状態の判定基準を参考とした。

(オ) 重要な種

a 重要な種の選定基準

重要な種の選定基準を表 2-11-4 に示す。

表 2-11-4 重要な種の選定基準

No.	略称	重要な種の選定基準と区分
①	天然記念物	「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号)に基づく天然記念物及び特別天然記念物 (区分) 特天：特別天然記念物 天：天然記念物 県：愛知県指定 市：名古屋市指定
②	種の保存法	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年法律第 75 号)に基づく国内希少野生動植物種、国際希少野生動植物種及び緊急指定種 (区分) 国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
③	環境省 RL	「環境省レッドリスト 2019」(環境省, 平成 31 年 1 月)の選定種 (区分) EX：絶滅(我が国ではすでに絶滅したと考えられる種) EW：野生絶滅(飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種) CR：絶滅危惧 IA 類(絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの) EN：絶滅危惧 IB 類(絶滅の危機に瀕している種で、IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの) VU：絶滅危惧 II 類(絶滅の危険が増大している種) NT：準絶滅危惧(現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種) DD：情報不足(評価するだけの情報が不足している種) LP：絶滅のおそれのある地域個体群(地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの)
④	愛知県 RL	「レッドリストあいち 2015」(愛知県ウェブサイト)の選定種 (区分) EX・EW：絶滅(愛知県ではすでに絶滅したと考えられる種)・野生絶滅(野生では絶滅し、飼育・栽培下でのみ存続している種) CR：絶滅危惧 IA 類(絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの) EN：絶滅危惧 IB 類(絶滅の危機に瀕している種で、IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの) VU：絶滅危惧 II 類(絶滅の危険が増大している種) NT：準絶滅危惧(存続基盤が脆弱な種) DD：情報不足(「絶滅」「絶滅危惧」「準絶滅危惧」のいずれかに該当する可能性が高いが、評価するだけの情報が不足している種) LP：地域個体群(その種の国内における生息状況に鑑み、愛知県において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群)
⑤	愛知県指定種	「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」(昭和 48 年 3 月 30 日条例第 3 号)に基づく指定希少野生動植物種の指定種
⑥	名古屋市 RL	「名古屋市版レッドリスト 2015」(名古屋市ウェブサイト)の選定種 (区分) EX・EW：絶滅(名古屋市ではすでに絶滅したと考えられる種)・野生絶滅(野生では絶滅し、飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種) CR：絶滅危惧 IA 類(絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの) EN：絶滅危惧 IB 類(絶滅の危機に瀕している種で、IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの) VU：絶滅危惧 II 類(絶滅の危険が増大している種) NT：準絶滅危惧(存続基盤が脆弱な種) DD：情報不足(評価するだけの情報が不足している種)

ｂ 重要な種の確認状況

現地調査で確認された重要な種の一覧を表 2-11-5 に、特徴及び現地確認状況を表 2-11-6(1)～(12)に、現地確認位置を図 2-11-4(1)～(5)に示す。

重要な種は、シロチドリ、コアジサシ、ハヤブサなど 3 目 6 科 12 種が確認された。

表 2-11-5 現地調査で確認された重要な種一覧

目 名	科 名	種 名	確認時期					確認場所		重要な種の選定基準					
			春 季	繁殖期	夏 季	秋 季	冬 季	事業予 定地内	事業予 定地外	①	②	③	④	⑤	⑥
チドリ	チドリ	シロチドリ	2						2			VU	繁殖:VU, 越冬:NT		NT
	シギ	オグロシギ	1						1				通過:VU		VU
		オオソリハシシギ	26		2				28			VU	通過:VU		NT
		ホウロクシギ	1						1		国際	VU	通過:VU		VU
		オバシギ			12				12		国際		通過:NT		NT
		ハマシギ	281						281			NT	越冬:NT, 越冬:LP		NT
	カモメ	ズグロカモメ	1						1			VU	越冬:EN		VU
		コアジサシ	12						12			VU	繁殖:EN, 通過:NT		VU
タカ	ミサゴ	ミサゴ	1	1	14	11	8	2	33			NT	繁殖:VU		NT
	タカ	チュウヒ				1	3		4		国内	EN	繁殖:CR, 越冬:VU		VU
		オオタカ				1			1			NT	繁殖:NT, 越冬:NT		NT
ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ			1	3	4	6	2		国内	VU	繁殖:VU, 越冬:NT		VU
3 目 6 科 12 種		種類数合計	8	1	4	4	3	2	12	0	3	10	12	0	12
		個体数合計	325	1	29	16	15	8	378	-	-	-	-	-	-

注) 重要な種の選定基準における①～⑥は、表 2-11-4 に示したNaを示す。

表 2-11-6(1) シロチドリの特徴及び現地確認状況

種 名	シロチドリ
形 態	全長 17～19cm。上面は灰褐色で、下面は白色。雄の夏羽では過眼線と胸側の斑が黒く、冬羽や雌ではこれらが褐色。雄の夏羽の頭頂は橙褐色だが、これも冬羽と雌では灰褐色と地味な色合い。飛ぶと翼に白い線が出る。 ^{くちばし} 嘴と脚は黒い。
分布の概要	ほぼ全国に分布し、繁殖するが、北海道、南千島では夏鳥、本州以南で留鳥。市内では、南部と北部の水辺に生息している。
生息地の環境／生態的特性	海岸や河川の下流部に生息し、昆虫類、クモ類、ゴカイ、トビムシ、小貝等、主に動物質を食べている。砂浜や河岸の砂礫地を少しくぼめて目立たぬ巣を作り、通常 3 卵（時に 4 卵）を産んで繁殖する。卵の孵化前後に外敵が近づくと、親鳥は翼を傷めたような動作（＝擬傷）をする習性がある。ピルッ、ピルッと鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	市の南部と北部に分布するが、分布の中心である庄内川河口付近で記録された数は、顕著に減少している。市外で繁殖して秋冬に訪れるものが元来多かったが、名古屋市周辺での砂浜の減少と一時的に砂地だった造成地の状況変化により、繁殖適地が激減したことが市内での減少の原因の一つと考えられる。
現地確認状況（春季）	干潮時に 1 個体、満潮時に 1 個体、合計 2 個体が確認された。いずれも事業予定地外の沿岸部のコンクリート護岸あるいは岩場で探餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(2) オグロシギの特徴及び現地確認状況

種 名	オグロシギ
形 態	全長 34～42cm。雄の夏羽では頭部～胸が赤褐色で、体の上面は赤褐色と黒と白の斑、上尾筒と尾の基半部は白く先端は黒い。翼を広げると黒い風切羽に白い帯が出る。胸側～脇には黒い横斑があり腹は白い。 ^{くちばし} 嘴は平均 9cm と長くまっすぐで、先は黒く基部は淡紅色。脚は長く黒い。雌の夏羽は雄に似るが、赤みが薄い。冬羽の上面は雄・雌とも灰褐色で淡色の羽縁があり、眉斑と喉は白く首～胸は灰褐色。若鳥は成鳥の冬羽に似るが褐色味を帯び、上面に黒褐色の小班がある。
分布の概要	小笠原諸島、伊豆諸島、大東諸島を除くほぼ全国に旅鳥として渡来し、九州では越冬するものもある。市内では、南部、ことに南西部に記録が集中している。
生息地の環境／生態的特性	4～5 月と 8～10 月に海岸や河口の干潟、海に近い水田等に渡来するが、春より秋に多い。昆虫類、クモ類、貝類、ゴカイ、ミミズ、小魚等を捕食する。キッキと鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	中川区、港区、南区、緑区に渡来しているが、1980 年代半ば以降、個体数は、減少している。水田等淡水環境の縮小が主原因で数が減ったのではないかと考えられる。
現地確認状況（春季）	干潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で探餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(3) オオソリハシシギの特徴及び現地確認状況

種 名	オオソリハシシギ	
形 態	全長 36～44cm。夏羽は体の上下面とも赤褐色で、背には黒い小斑が散在する。腰は白く、尾は白地に黒褐色の細い縞模様がある。冬羽の上面は灰褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は淡い灰褐色で胸や脇に褐色の斑がある。若鳥は冬羽に似るが、上面の斑の形に特徴がある。嘴は平均 10cm と長く、わずかに上に反っており、基部は肉色で先端部は黒い。脚は長いが体形が似てやや小型のオグロシギより短い。	
分布の概要	ほぼ全国に旅鳥として渡来し、少数は越冬する。市内では、南西部でのみ記録されている。	
生息地の環境／生態的特性	4～5 月と 7～10 月頃渡来し、主に干潟でゴカイ、貝、小エビ、トビムシ、昆虫類等を捕食する。春・秋の渡来数もオグロシギとは逆で、本種は春に多い。ケッケツと鳴く。	
現在の生息状況／減少の要因	近年は 1980 年代の 1/5～1/4 に減少している。大型の鳥が必要とする広く安全性の高い湿地と、満潮時に休息できる後背地が周辺部から消えつつあることが、減少の要因ではないかと推測される。	
現地確認状況	春季	干潮時に 26 個体が確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で、数個体～十数個体の小群で探餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。
	夏季	干潮時に 2 個体が確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で、他のシギ類とともに探餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(4) ホウロクシギの特徴及び現地確認状況

種 名	ホウロクシギ	
形 態	全長 54～68cm。上・下面とも淡褐色地に黒褐色の斑点があり、ダイシャクシギに酷似するが、腰、下腹部、翼下面が白くない点で異なる。嘴が平均 16.5cm と非常に長く、大きく下に曲がっている特徴等ダイシャクシギと共通で、外形だけでは両種の識別はできない。	
分布の概要	ほぼ全国に旅鳥として渡来し、本州、九州の一部、琉球等に少数越冬記録がある。市内では、南西部でのみ記録されている。	
生息地の環境／生態的特性	主として 4～5 月と 8～10 月頃渡来し、広い干潟でカニ、シャコ、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等を捕食する。カーリュー、ホーイーン、クーヒー等と聞こえるよく通る声で鳴き、ダイシャクシギと聞き分けることは難しい。	
現在の生息状況／減少の要因	庄内川河口～木曽川河口付近が県内でも有数の渡来地で、1980 年代には毎年 25～30 羽が飛来していたが、近年は 1 桁になった。名古屋市だけでなく周辺を含めた広い干潟の減少と後背地の環境悪化が減少の要因であろうと推測される。	
現地確認状況 (春季)	干潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で探餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。	

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(5) オバシギの特徴及び現地確認状況

種 名	オバシギ
形 態	全長 26～28cm。夏羽では頭上から体の背面は黒っぽく、肩羽は赤褐色で、胸が黒い。冬羽では肩羽の赤褐色と胸の黒が消え、全体がやや淡色になる。若鳥は冬羽に似る。嘴と脚は黒い。飛翔時、翼に白線が出る他、腰が白く見える。
分布の概要	北海道、南千島、本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美諸島、琉球諸島に旅鳥として渡来している。市内では、南部 3 区（港区、南区、緑区）に旅鳥として渡来する。
生息地の環境／生態的特性	5 月下旬～6 月下旬頃、亜寒帯のアルパイン・ツンドラで繁殖し、渡り途中（4～5 月、8～10 月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見ることもある。キッキまたはケッケツと聞こえる声で鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	庄内川河口付近での年間最多観測数は、2003 年 9 月 158 羽だったものが、2014 年 10 月 30 羽と、2 桁に減少している。繁殖地では、ヒナに昆虫（アブ・ハエの幼虫など）を与える他は、主として漿果・堅果などの植物質を食べ、渡り期・越冬期には干潟で二枚貝を中心に、巻貝・甲殻類・環形動物などを、更に水際を離れた砂礫地でヨコエビなどを食べる。開発による生息環境の悪化が減少の主要因ではないか、と懸念される。
現地確認状況（夏季）	干潮時に 12 個体が確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で、他のシギ類とともに採餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典）「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」（名古屋市ウェブサイト）

表 2-11-6(6) ハマシギの特徴及び現地確認状況

種 名	ハマシギ
形 態	全長 19～23cm。嘴は黒く長めで、やや下に曲がっている。足も黒い。夏羽の上面は赤褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は腹の大きな黒斑以外は白っぽい。冬羽の上面は灰褐色で下面は汚白色（黒斑は無い）。飛翔時、翼に細い白線が出る。
分布の概要	北海道、南千島、佐渡に旅鳥、本州、四国、九州以南に冬鳥または旅鳥、琉球諸島には冬鳥として渡来する。市内では、秋期、主として南西部の干潟に群れて渡来し、翌春まで居残るものと、さらに暖地に渡って冬を越すものがある。
生息地の環境／生態的特性	主として海岸や河口の干潟に群れ、ゴカイや二枚貝、巻貝、トビムシ等の小動物を捕食する。干潟等で群飛する際は一斉に方向を転換するので、冬羽の白い腹をこちらに向けた時はきらめいて美しい。ジュリーと聞こえる声で鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	庄内川河口付近での最多記録数の概略は、1993 年 5 月に 10,491 羽、2015 年 2 月に 874 羽で、1993 年と比べると 2015 年は 1 割以下に減っている。減少の要因は解明されていないが、巨大な台風や河川工事が、干潟の自然な姿を破壊した可能性が考えられる。
現地確認状況（春季）	干潮時に 281 個体が確認された。事業予定地外である干潟で、群れで採餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典）「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」（名古屋市ウェブサイト）

表 2-11-6(7) ズグロカモメの特徴及び現地確認状況

種 名	ズグロカモメ
形 態	全長 29～33cm。背と翼の上面は淡い青灰色。初列風切の前側は白く、先端に黒斑がある。胸～腹と尾は白。くちばしは短めで黒く、脚は赤い。頭部は冬羽では白く、目の後ろに黒斑があるが、夏羽では頭全体がまっ黒になる。 若鳥は翼に黒斑、尾の先端には黒帯があり、脚は褐色。ユリカモメに似るが小型で、くちばしの長さや色が異なるほか、翼端の黒斑の並びの模様等も異なる。
分布の概要	北海道～南西諸島、伊豆諸島に渡来しているが、九州以外では少ない。市内では、南西部で冬期記録されている。
生息地の環境／生態的特性	冬期海浜に渡来し、干潟の上を飛翔しながら、舞い降りてカニやゴカイを捕食する。ユリカモメの群中にいることもある。
現在の生息状況／減少の要因	市内では 1985 年 2 月庄内川河口での記録以来、滞在期間、個体数とも漸増し、近年は毎冬 10 羽以上が越冬するようになった
現地確認状況（春季）	干潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた海上で、ユリカモメの小群とともに採餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(8) コアジサシの特徴及び現地確認状況

種 名	コアジサシ
形 態	全長 21～31cm。先の尖った長い翼と深く切れ込んだ尾が特徴。背と翼の上面は淡青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上～後頭は黒く、くちばしは黄色で先端が黒く、脚は橙黄色。冬羽では頭頂が白、くちばしは黒、脚は褐色に変わる。若鳥は頭頂、後頭、背、翼の上面は淡褐色と暗褐色の斑模様で翼端は黒い。額と下面は白い。
分布の概要	本州、四国、九州、南西諸島に夏鳥として渡来し、各地で繁殖しているが、総数は減少しつつある。市内では、海沿いの南部地域のほか、多くの区で記録されている。
生息地の環境／生態的特性	4 月中旬～10 月上旬、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。5～7 月頃、水辺に近い砂礫地で集団繁殖する。犬や人などの外敵が巣に近づくと、集団で威嚇攻撃をする習性がある。飛びながらクリックリッと鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	渡来地は市内に広く分布している。本市での主要生息地である庄内川河口付近では、1888 年に 3,000 羽以上が記録された後、2009 年 5 月には 500 羽となり、2014 年 5 月 289 羽と激減はしていない。しかしこの間に港区稲永町や南陽町のコロニーが水没等で大打撃を受けた後、繁殖は厳しい状況になっている。この鳥の減少は繁殖地となる砂礫地の縮小・消滅が最大の理由であるが、さらにはカラスによる卵やひなの食害が近年国内各地で深刻化している。
現地確認状況（春季）	干潮時に 12 個体が確認された。事業予定地外で調査地点から 300m 以上離れた干潟で、小群で採餌する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(9) ミサゴの特徴及び現地確認状況

種 名		ミサゴ
形 態		全長雄約 55cm、雌約 64cm。ほぼトビ大だが、翼は細長く尾は短め。頭は白く、過眼線が黒い。体の上面は黒褐色。下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。若鳥の上面には淡褐色のうろこ模様がある。魚食鳥として進化し、前後に 2 本ずつ向く脚指を持つ。
分布の概要		北海道、本州、南千島で夏鳥、本州以南では留鳥。市内では、近年広く記録されている。
生息地の環境／生態的特性		海岸や湖沼に生息し、岩棚上や大木の梢に（近年は人工的な鉄塔の上でも）営巣する。春・秋の移動期には内陸で見られることもある。水面上で停空飛翔をしてねらいを定め、急降下して中・大型の魚をつかみ取る。キョッキョッキョッキョと聞こえる高い声で鳴く。
現在の生息状況／減少の要因		市内では、近年熱田区を除く全区で記録があり、その多くは通過個体だが、港区の庄内川、新川、日光川河口付近には周年生息し、年を追って増加している。近隣地での繁殖の可能性も示唆される。
現地確認状況	春季	干潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外の海上で、飛翔移動する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。
	繁殖期	場内踏査時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外の沿岸部上空で、探餌飛翔する様子が確認された。繁殖を示唆する行動等は確認されなかった。
	夏季	干潮時に 10 個体、満潮時に 3 個体、場内踏査時に 1 個体、合計 14 個体が確認された。多くの個体は事業予定地外の干潟の杭にとまるか、海上を飛翔移動あるいは探餌飛翔する様子が確認された。1 個体のみ事業予定地上空を飛翔移動したが、探餌など特筆すべき行動は確認されなかった。
	秋季	干潮時に 10 個体、満潮時に 1 個体、合計 11 個体が確認された。多くの個体は事業予定地外の干潟に降りているか杭にとまっていた。とまっている個体は休息あるいは捕らえた魚類を食べていた。いずれも事業予定地外での確認であった。
	冬季	干潮時に 6 個体、満潮時に 1 個体、場内踏査時に 1 個体、合計 8 個体が確認された。多くの個体は事業予定地外の海上の流木や堤防上の木杭にとまっていたか、海上を飛翔していた。1 個体のみ事業予定地上空を飛翔したが、飛翔通過したのみであった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(10) チュウヒの特徴及び現地確認状況

種 名		チュウヒ
形 態		全長雄約 48cm、雌約 58cm。トビよりやや小さいタカで、雄には色の変異が多く、頭～背は灰色、黒色、灰褐色等。腰が白く、中央の尾羽は灰色。下面には白地に暗褐色の縦斑があり、翼の下面は白っぽい。雌は頭部が淡褐色、体の上面は褐色、下面は茶褐色のものが多い。若鳥は上下面とも黒褐色で下面に縦縞があり、翼には横縞があるが、やはり変異が多い。滑翔時、両翼を扁平 V 字形に保つ。
分布の概要		北海道、南千島、東北地方北部で夏鳥として繁殖し、本州以南や洋上の島々では主として冬鳥（石川県、滋賀県、愛知県、三重県及び四国東北部、九州東北部には少数留鳥もいる）。市内では、主に南西部で記録されている。
生息地の環境／生態的特性		沿岸部のアシ原（営巣地、ねぐら）と周辺に農地（餌場）のある環境に生息し、ネズミ、小型～中型の鳥類、魚類等を捕食する。 4～7 月頃、アシ原の地面にアシやススキの茎を積み重ねて巣を作り、5～7 卵を産んで繁殖する。アシ原上を低く飛び、時どき停空飛翔して餌動物を狙う。
現在の生息状況／減少の要因		市内での分布の中心は庄内川、新川、日光川の下流部～河口部一帯。河川環境の変化などの影響もあって、繁殖期には見られなくなり、2004 年以後の記録は非繁殖期中心となった。
現地確認状況	秋季	満潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外である海上を単独で羽ばたき飛翔する様子が確認された。ハンティング行動などは確認されず、移動のための飛翔であったと思われる。
	冬季	干潮時に 1 個体、満潮時に 2 個体、合計 3 個体が確認された。干潮時には事業予定地外のヨシ原上空を旋回飛翔する様子が確認され、探餌していたと考えられる。満潮時には事業予定地外の海上を 2 羽で飛翔する様子が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(11) オオタカの特徴及び現地確認状況

種 名		オオタカ
形 態		全長雄約 50cm、雌約 56cm。ほぼカラス大のタカで、先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。成鳥の上面は暗灰色で、目から後方が黒く、白い眉線が目立つ。下面は白地に黒く細い横縞模様がある。尾には 4 本の黒っぽい横帯がある。若鳥は上面褐色で、下面には暗褐色の縦斑がある。
分布の概要		本州以北で繁殖し、季節による大きな移動はしない。市内では、ほぼ全域で観察され、近年記録は増す傾向にある。
生息地の環境／生態的特性		営巣環境である高木を含む林と、採食環境である林縁部や農耕地とが混在する里山に生息し、中・小型の鳥やヘビ、リスなどを捕食する。より山地を好むクマタカ、イヌワシと異なり、生息環境が人の生活域と接する。マツなどの高木に営巣し、4～5 月頃 3～4 卵を産んで繁殖する。キッキキッと鳴く。
現在の生息状況／減少の要因		市の東部では 1980 年代後半からの記録が多く、繁殖の報告もある。市の中部、西部の記録はほとんどが 1990 年代以降のもので、2 ヶ月、3 ヶ月と連続記録されている地域もあることから、現実には増加している可能性がある。
現地確認状況（秋季）		干潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地外である海上を単独で羽ばたき飛翔する様子が確認された。幼鳥であり渡り途中であった可能性がある。ハンティング行動などは確認されなかった。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

表 2-11-6(12) ハヤブサの特徴及び現地確認状況

種 名		ハヤブサ
形 態		全長雄約 42cm、雌約 49cm。翼端が尖っている。雌雄同色で、成鳥は上面青黒色。下面は白地に黒く細かい横縞がある。若鳥は上面暗褐色、下面は淡褐色地に暗褐色の縦縞がある。成・幼鳥とも両ほおに目の下から連なるひげ状の斑がある。
分布の概要		北海道、本州、佐渡、九州等の主として海岸沿いで繁殖し、冬期の記録はほぼ全国に広がっている。市内では、南西部で冬期を中心に多く観察されるほか、北部でも春・秋の移動期に観察される。
生息地の環境／生態的特性		国内では特に北海道や東北地方の沿岸部に多く、地上性天敵が近寄れない岩場で繁殖する。多くは留鳥だが、北海道東北部や本州の内陸部で繁殖するものは冬期暖地へ移動する。ヒヨドリ等中型以上の鳥を主に、ウサギやネズミを狙うこともあり、相手が鳥の場合は空中で体当たりして蹴り落とす攻撃法をとる。キッキキッキとかケーケーケーと聞こえる鋭い声で鳴く。
現在の生息状況／減少の要因		名古屋市へは旅鳥または冬鳥として渡来し、藤前干潟周辺では見る機会が多いが、近年、冬期以外にも観察されるようになった。
現地確認状況	夏季	満潮時に 1 個体のみ確認された。事業予定地上空を旋回飛翔後、海上へと飛翔する様子が確認された。
	秋季	場内踏査時に 3 個体が確認された。1 個体が事業予定地内の煙突付近でチョウゲンボウに対して威嚇する様子が確認された。また、事業予定地上空で 2 個体が飛翔する様子が確認された。そのうち 1 個体が探餌後、海上へ飛翔し、もう 1 個体は後を追いつ、海上へ飛翔する様子が確認された。
	冬季	干潮時に 3 個体、場内踏査時に 1 個体、合計 4 個体が確認された。いずれも事業予定地の煙突付近で成鳥が単独で飛翔する様子が確認された。そのうち 1 個体は探餌する様子が確認され、別の 1 個体はカワラバトを足に掴んでおり、ハンティングしたと思われる。また、事業予定地内の緑地でカワラバトの食痕が確認されており、本種によって捕食された可能性がある。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」(名古屋市ウェブサイト)

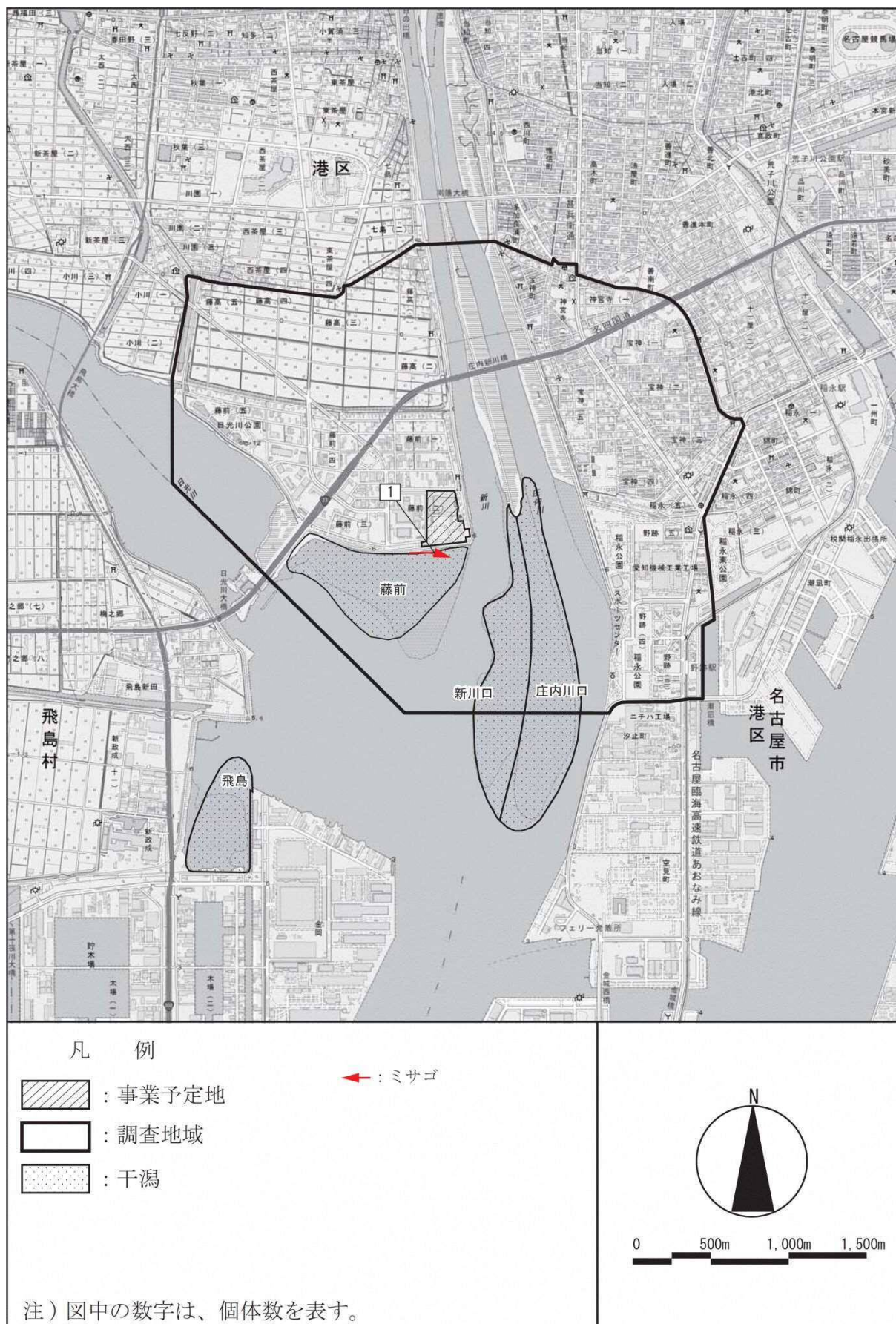


図 2-11-4(2) 重要な種の現地確認位置 (繁殖期)

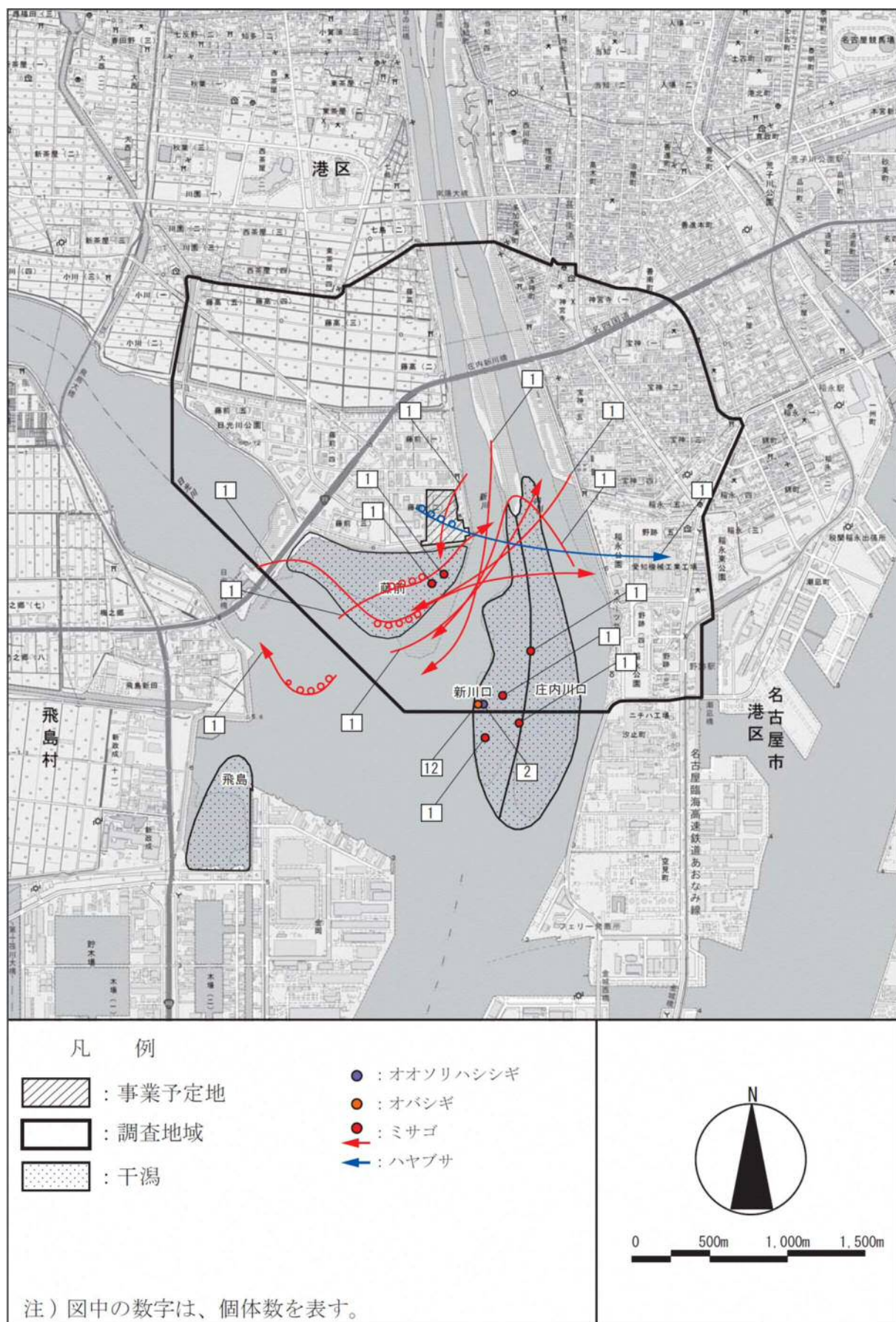
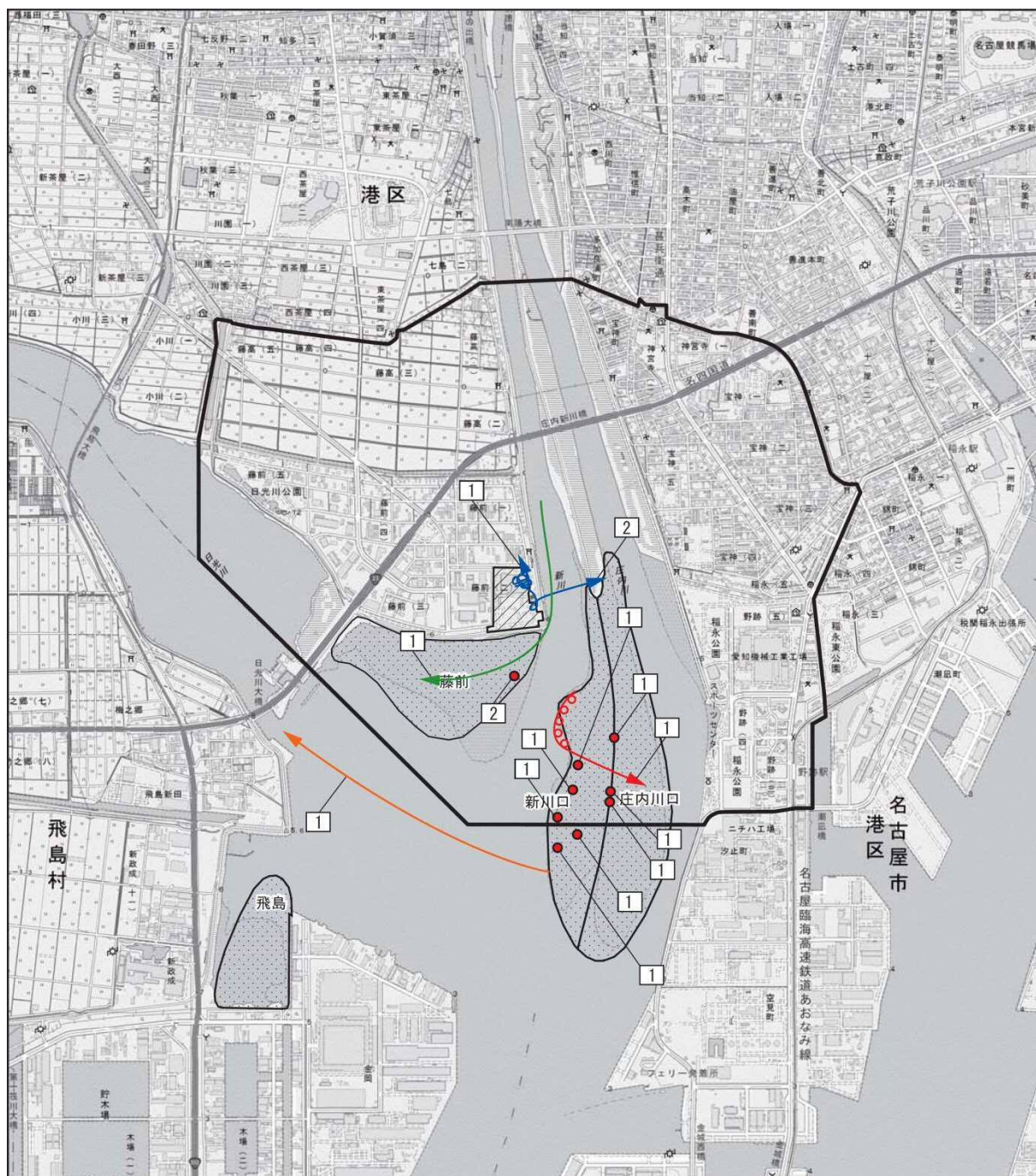


図 2-11-4(3) 重要な種の現地確認位置 (夏季)



凡 例

-  : 事業予定地
-  : 調査地域
-  : 干潟

-  : ミサゴ
-  : ハヤブサ
-  : チュウビ
-  : オオタカ



0 500m 1,000m 1,500m

注) 図中の数字は、個体数を表す。

図 2-11-4(4) 重要な種の現地確認位置 (秋季)

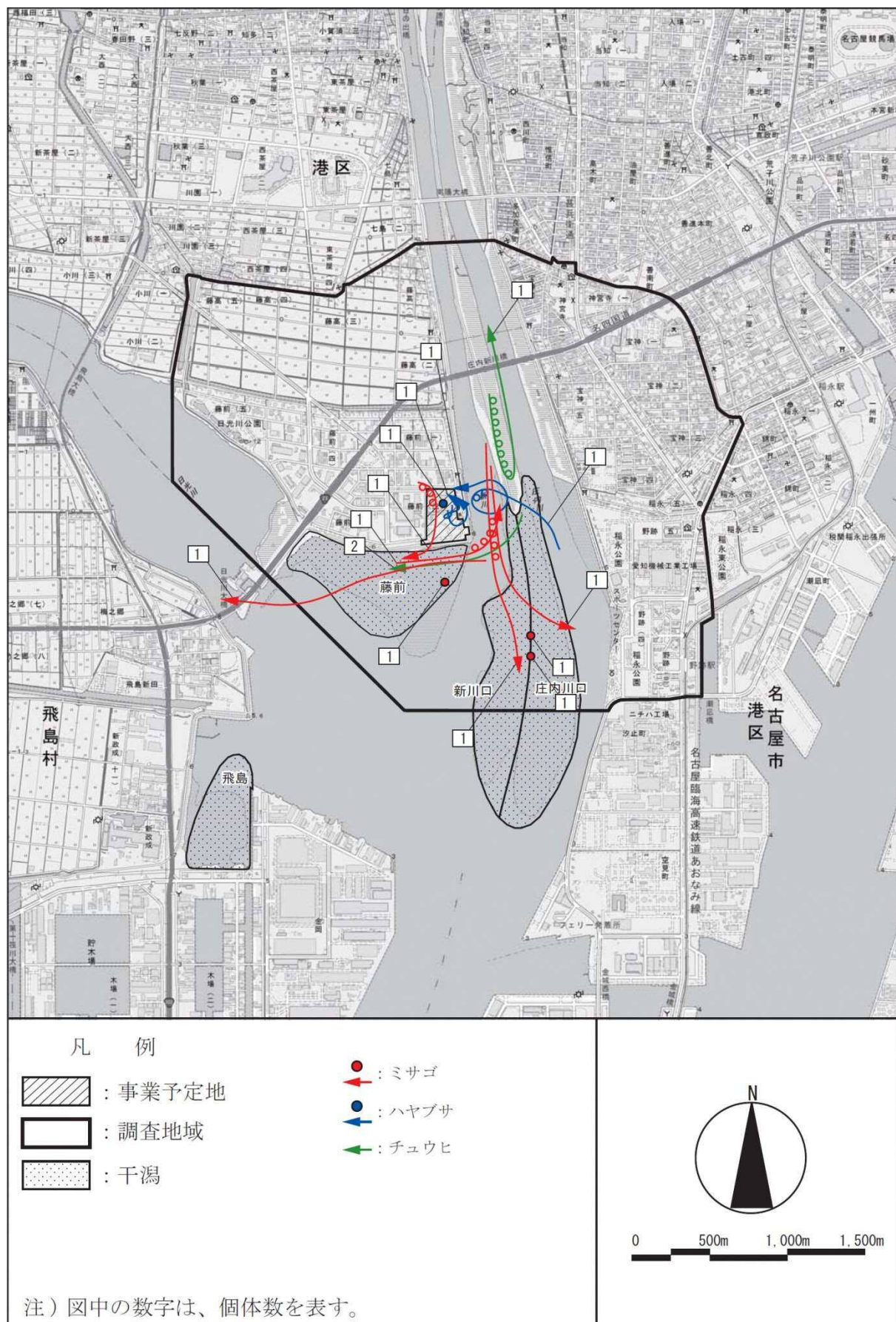


図 2-11-4(5) 重要な種の現地確認位置 (冬季)

11-1-3 予 測

(1) 予測事項

建設機械の稼働に伴う大気質、騒音及び振動が注目すべき生息地を生息環境とする鳥類へ与える影響

(2) 予測対象時期

表 2-11-7 に示すとおり、建設機械の稼働による大気質、騒音及び振動の影響が最大となる時期とした。

表 2-11-7 予測対象時期

項 目	予測対象時期
建設機械の稼働（大気質）による鳥類への影響	工事着工後 31～42 ヶ月目の 1 年間
建設機械の稼働（騒 音）による鳥類への影響	工事着工後 32 ヶ月目
建設機械の稼働（振 動）による鳥類への影響	工事着工後 32 ヶ月目

(3) 予測場所

事業予定地及びその周辺の水域とした。

(4) 予測方法

現地調査で確認された重要な種（表 2-11-5（p. 335 参照））を対象として、事業予定地及びその周辺における土地利用の状況並びに建設機械の稼働に伴う大気質、騒音及び振動の予測結果に基づき、定性的に予測した。

(5) 予測条件

ア 事業予定地及びその周辺における土地利用の状況

第 1 部第 4 章 4-2(2)「土地利用」（p. 84 参照）に示したとおりである。

イ 建設機械の稼働に伴う大気質、騒音及び振動の予測結果

第 2 部第 1 章 1-3「建設機械の稼働による大気汚染」（p. 124 参照）、第 2 部第 3 章 3-1「建設機械の稼働による騒音」（p. 219 参照）及び第 2 部第 4 章 4-1「建設機械の稼働による振動」（p. 249 参照）に示したとおりである。

ウ 注目すべき生息地の分布

事業予定地南側の鳥獣保護区特別保護地区とした。（第 1 部第 4 章 4-2(7)ウ(エ)「鳥獣保護区等の指定状況」（p. 106 参照））

(6) 予測結果

現地調査において、シロチドリ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、オバシギ、ハマシギ、ズグロカモメ、コアジサシ、ミサゴ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサの12種が、事業予定地外の干潟（鳥獣保護区特別保護地区）で採餌する様子等が確認された。また、ミサゴ、ハヤブサの2種が、事業予定地内の上空で飛翔する様子等が確認されたが、いずれも繁殖を示唆する行動は確認されなかった。

現地調査で確認されたこれらの鳥類は、事業予定地周辺が準工業地域であることや、事業予定地西側については藤前流通業務団地に指定され、流通関係の事業所等が多く立地していることから、人為的環境に適応していると考えられる。

建設機械の稼働に伴う環境の変化（大気質、騒音及び振動への影響）による一時的な忌避行動は否定できないが、工事により生息環境を大きく変えるものではなく、鳥類への影響は小さいと予測される。

11-1-4 環境保全措置

(1) 予測の前提とした措置

- ・高さ 3m の仮囲いを設置する。
- ・排出ガス対策型及び低騒音型の建設機械を採用する。

(2) その他の措置

- ・建設機械のアイドリング・ストップ及び点検・整備を徹底する。
- ・工事の実施にあたっては、丁寧な作業に努める。
- ・建設機械は、極力、小型のものを採用する。

11-1-5 評価

予測結果によると、建設機械の稼働に伴う環境の変化（大気質、騒音及び振動への影響）による一時的な忌避行動は否定できないが、事業予定地及びその周辺における土地利用の状況から人為的環境に適応していると考えられることや、工事により生息環境を大きく変えるものではないことから、鳥類への影響は小さいと判断する。

本事業の実施にあたっては、建設機械のアイドリング・ストップ及び点検・整備を徹底する等の環境保全措置を講ずることにより、鳥類への影響の低減に努める。

11-2 供用時

11-2-1 概 要

施設の稼働（大気質、騒音及び振動）による鳥類への影響について検討を行った。

11-2-2 調 査

11-1「工事中」（11-1-2「調査」（p. 325）参照）に示すとおりとした。

11-2-3 予 測

(1) 予測事項

施設の稼働に伴う大気質、騒音及び振動が注目すべき生息地を生息環境とする鳥類へ与える影響

(2) 予測対象時期

施設の稼働が定常状態となる時期とした。

(3) 予測場所

事業予定地及びその周辺の水域とした。

(4) 予測方法

現地調査で確認された重要な種（表 2-11-5（p. 335 参照））を対象として、事業予定地及びその周辺における土地利用の状況並びに施設の稼働に伴う大気質、騒音及び振動の予測結果に基づき、定性的に予測した。

(5) 予測条件

ア 事業予定地及びその周辺における土地利用の状況

第 1 部第 4 章 4-2(2)「土地利用」（p. 84 参照）に示したとおりである。

イ 建設機械の稼働に伴う大気質、騒音及び振動の予測結果

第 2 部第 1 章 1-5「施設の稼働による大気汚染」（p. 175 参照）、第 2 部第 3 章 3-3「施設の稼働による騒音」（p. 235 参照）及び第 2 部第 4 章 4-3「施設の稼働による振動」（p. 260 参照）に示したとおりである。

ウ 注目すべき生息地の分布

事業予定地南側の鳥獣保護区特別保護地区とした。（第 1 部第 4 章 4-2(7)ウ(エ)「鳥獣保護区等の指定状況」（p. 106 参照））

(5) 予測結果

現地調査において、シロチドリ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、オバシギ、ハマシギ、ズグロカモメ、コアジサシ、ミサゴ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサの12種が、事業予定地外の干潟（鳥獣保護区特別保護地区）で採餌する様子等が確認された。また、ミサゴ、ハヤブサの2種が、事業予定地内の上空で飛翔する様子等が確認されたが、いずれも繁殖を示唆する行動は確認されなかった。

現地調査で確認されたこれらの鳥類は、事業予定地周辺が準工業地域であることや、事業予定地西側については藤前流通業務団地に指定され、流通関係の事業所等が多く立地していることから、人為的環境に適応していると考えられる。

施設の稼働に伴う環境の変化（大気質、騒音及び振動への影響）による一時的な忌避行動は否定できないが、既存施設の稼働時から生息環境を大きく変えるものではなく、鳥類への影響は小さいと予測される。

11-2-4 環境保全措置

- ・ごみ質の均一化を図り、適正負荷による安定した燃焼を維持することで、大気汚染物質の低減に努める。
- ・各設備の定期点検を実施し、常に正常な運転を行うように維持管理を徹底する。
- ・ダイオキシン類対策として、燃焼温度、ガス滞留時間等の管理により安定燃焼の確保に努め、定期的な調査を実施して適正に管理する。
- ・大型の送風機については、消音器の設置や回転数の制御を行う。
- ・振動の大きい機器は、防振ゴム、防振架台又は独立基礎の上に設置する。
- ・施設関連車両の場内走行にあたっては、制限速度を定め、その厳守を徹底する。

11-2-5 評価

予測結果によると、施設の稼働に伴う環境の変化（大気質、騒音及び振動への影響）による一時的な忌避行動は否定できないが、事業予定地及びその周辺における土地利用の状況から人為的環境に適応していると考えられることや、既存施設の稼働時から生息環境を大きく変えるものではないことから、鳥類への影響は小さいと判断する。

本事業の実施にあたっては、各設備の定期点検を実施し、常に正常な運転を行うように維持管理を徹底する等の環境保全措置を講ずることにより、周辺の環境に及ぼす影響の低減に努める。